

講 演

聖書が示すいのちの尊厳

水 谷 潔

はじめに

今、私たちの耳には毎日のように人のいのちが奪われるニュースが届きます。本来、愛し育てるべき子どもを親が殺す。逆に子どもが憎しみから親を殺すような事件を時に耳にします。連日のように小さな子どもたちや将来ある若者の命が奪われるような事件ばかりです。保険金をかけて家族や友人を殺す事件があります。誰でもいいから殺したかったという殺人まで報道されています。いとも簡単に人の命が日々奪われている日本社会です。

そうした中であって、私たち自身もいのちに対する感覚が麻痺しかねないのが現状でしょう。いのちが奪われることへの痛みや悲しみが色あせてしまい、本来持っていたはずのいのちを大切に思う心を失いかねない昨今です。

そこで、お互いがそうならないように、いいえ、むしろ私たちが積極的にいのちの大切さを確信しながら、それをこの日本の社会に生きるために、またいのちの大切さとそれを必要としている方々に伝えたいものです。

* 小さいいのちを守る会 代表

そこで、今からのとき、「いのち、なぜ大切？ どう大切？ どれほど大切なのか？」と題しまして、三つの聖書箇所からいのちが「なぜ大切であるか」、いのちが大切である根拠、「どう大切なのか」、いのちの大切さの性質、「どれほど大切」いのちの大切さの程度、この三つをお取次ぎいたします。

いのちなぜ大切？ ～神の所有だから

それではさっそく一つ目です。「いのち、なぜ大切か？」聖書の中にはいのちの大切さを示す言葉は数え切れないほどありますが、今日は一箇所、創世記の1章26節の御言葉を取り上げて、なぜ、いのちが大切なのかを共に考えたいと願います。

「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう』」

聖書によれば、私たち人間は神様にかたどって、つまり神様に似せて、また、神様の「かたち」に造られたのです。「かたち」と言いまして神様は目に見えるお姿はお持ちではありません。ですからそれが外面的な形ではないのは明らかです。

ご存知の方も多いかと思いますが、この「かたどって」という言葉が意味する「かたち」という言葉は、英語の聖書ではイメージと訳されています。フォームやシェイプではなく、イメージなのです。まさに外見のない目に見えない「かたち」です。つまり、神様が知性や感情、意志をお持ちで霊的な存在であるように、私たちも、それに似たものとして造られています。

私たち人間は神様に似せて、そのイメージに従って創造されているのです。

豊臣秀吉の時代のお話です。豊臣秀吉が千利休にこう尋ねたそうです。「のお、利休、下々の者はわたしがサルに似ておると申しているそうだが、そなたはどう思う？」そこで質問です。皆さんが千利休であったらどう答えるでしょう。私もそう思いますと応えてしまっては身も蓋もありません。一方、そのようなことはございませんと応えるのも白々しくて面白みがありません。そこで、千利休はこう応えたそうです。「秀吉様がサルに似ておられるのではございませぬ。サルどもめが、秀吉様に似ておるのです。」

何が申し上げたいかと言いますと、神様が人間に似ているのではなく、人間が神様に似ているのです。よく「神様は人格的な存在です」と言いますが正確には「人間が神格的な存在です」というのがより聖書的なようです。

人間に似た神様は聖書の示す神様ではありません。それは偶像です。古事記のような日本神話やギリシャ神話に登場する神様は人間そっくりです。嘘をつく、盗む、不倫はすると本当に人間に似せられて作り上げられた神々です。

聖書が示す人間観は全くの正反対です。神様が人間に似ているのではなく、私たち人間が神様に似せて、そのイメージに従って創造されたのです。知性を持ち、情緒を持ち、意志を持ち、何より霊的な存在として私たちは造られているのです。

神に似せて、神にかたどって私たち人間が造られたということ、それは私たちのいのちは神様のものであることを意味します。つまり、いのちは神様のものであって私たち自身のものではないということです。

福音書には「カイザルのものはカイザルに神のものは神に返しなさい」

というイエス様の御言葉があります。パリサイ人やヘロデ党がイエス様を陥れようとして「カイザルに税金を納めてよいでしょうか？」と尋ねます。それに対してイエス様は税金として納めるデナリ貨幣を差し出させて「これは誰の肖像、誰の記号ですか？」と尋ねます。パリサイ人とヘロデ党は「カイザルのです」と応えます。そこで「カイザルのものはカイザルに神のものは神に返しなさい」とイエス様が結論を出されるのです。

古代社会では貨幣に刻まれた肖像は、その貨幣が刻まれた人物のものであることを意味しました。刻印は所有者を意味したのです。つまり、デナリ貨幣は持ち主のものでなく究極的にはローマ国王、カイザルのものでした。それがイエス様のおっしゃる「カイザルのもの」という意味です。

では、一方、神のものとは何でしょう。貨幣のように神の肖像が刻まれたものそれはなにでしょう？ それは神の肖像、神の似姿、神の形に作られた私たち人間のことです。ちょうどカイザルの肖像が刻まれた貨幣がカイザルのものであるように、神の似姿、肖像が刻み込まれた私たちは神のものなのです。ですから、「イエス様は、お金はカイザルものだから税金は納めなさい、しかし、私たちの心は神のものだから、カイザルに心まで渡すことはない」ということでしょう。

そのように神に似せて、神にかたどって私たち人間が造られたということ、それは私たちのいのちは神様のものであることを意味します。神様の肖像が刻み込まれた私たちのいのちは、私たちのものではありません。

私たちのいのちはあくまで神様からおあずかりしたものであって、私たち自身のもではありません。いのち、それは究極的には神様のものがあります。ですから、私たち人間には自分のいのちであれ、人のいのちであれ、勝手に傷つける権利はありません。ましてや殺す権利などないのです。自分のいのちは自分のものでないからこそ、大切にしなければならないのです。

今、日本では年間に3万件を超える方々が自らのいのちを断っています。日本の自死者には精神疾患の方も多く、深い孤独や苦しみの中におられますことを思うと簡単に判断はできません。しかし、聖書的な原則としては、どんなに苦しくても、自分のいのちは自分のものではないのだから、自分で奪う権利はないのです。私たちは「この方のいのちは神様のものだから、自死させてはいけない」との思いで、自死を願う方々に寄り添いながら、助けることができるでしょう。

また、日本では今、年間約109万の出生数があるそうです。それに対して、厚生労働省の発表では年間の中絶件数は約25万だそうです。しかし、実数はその数倍にあたるだろうと予想されます。神様は胎児の時から私たちを愛の眼差しで見ておられ、書物に記録しておられることを思うとき、人工妊娠中絶はどんなにか神様の心を痛めさせているだろうかと思います。

「きみは愛されるため生まれた」という素晴らしい賛美があります。私たちは神様に会い、愛されるために生まれてきます。そしてお互いが出会い、愛し合うために生まれてくるのです。私たち人間には誰一人それを中絶によってそれを阻む権利はありません。

テレビで大人気のビートたけしさんが、中学生になった頃、大変本質的哲学的な問いかけを母親にしたそうです。「かあちゃん、俺どうして生まれてきたんだ？」母親はこう応えたそうです。「墮ろす金がなかったからだよ。」あまりの貧しさに中絶手術の費用が払えなくて仕方なくて出産せざるを得なかったというわけです。

私はビートたけしさんを見るたびに思います。私がたけしさんに出会えたのは中絶されなかったからだ。日本の芸能界をリードし、今や世界的な映画監督でもあるたけしさんはまさに日本社会の共有財産と言えるでしょう。聖書によれば、私たちは神様に会い愛し合うため、またお互いが出会い、愛しあうために生まれてくるべきなのです。中絶によってそれを阻んではならないのです。

いのちなぜ大切？ ～他のいのちとの絶対的差異のゆえに

さらに、神に似せて、神にかたどって私たち人間が造られたということ、それは私たち人間のいのちは他の被造物と違うということの意味します。つまり、人間のいのちと動物の命はその価値において絶対的な違いがあるということ、人間の命の尊厳は他のいのちに比べるなら別格であるということの意味します。

創世記1章によれば被造物はすべて「何々あれ」と神様が命ずるとその通りになったという方法で造られました。しかし、人間だけは唯一の例外です。人間だけは神に似せて神の形に、神様の刻印を受けて、神の霊を吹き込まれて創造されたのです。ここに人間のいのちと他の命の絶対的な違いがあるのです。だから、この1章26節にあるように人間は動物を支配する役目を与えられているのです。「支配する」と言いますと何か横暴な印象を受けますが、これは人間が神様の栄光を現すために、他のいのちや地球環境を正しく管理、開発することを命じていると解釈されます。

聖書は明らかに、神様の御心に従う範囲において、人間以外の他のいのちを殺して、私たちが生きることを認めています。この地球は人間だけのものではありませんし、動物たちのいのちも神様が作られたのですから、それも大切です。しかし、聖書によれば他のいのちよりも人間が優先されることが神様の御心なのです。

「いただきます」という言葉があります。日本では食事の前に「いただきます」と言います。あるラジオ番組で知ったのですが、この「いただきます」という言葉の意味は、「あなたの命を私の命としていただきます」という意味だそうです。

たとえば、食卓に焼き魚が乗っているとします。その焼き魚に向かって「お魚さん、あなたの命を、私の命としていただきます」とお礼を言っているのだそうです。昔は今のように魚の切り身がパックになって、スーパーに

並んでいたわけではありません。ですから、昔の人は生き物が殺されて、それを自分たちが食べているという意識が強かったでしょう。きっと昔の人々は、動物や植物の犠牲の上に自分の命が保たれているという自覚があったことでしょう。

今日まで私たちが生きてくるために一体、何匹の魚、何頭の牛、何匹の豚、何羽の鶏のいのちが犠牲にされているでしょう。そうした犠牲になった莫大ないのちの重みを考えるだけでも、人間のいのちの大切さが理解できるでしょう。

お互いのいのちは、他の生き物のいのちの犠牲の上になりたっています。それを神様は認めておられます。なぜでしょうか？ それ程人間のいのちが大切だからです。異論もあるでしょうが、私は、人間が動物の肉を食べること、清潔に暮らすためにゴキブリやハエを殺すこと、医学発展やクスの開発などのために必要な動物実験をすることは、神様がお許し下さることだと考えています。

逆に、動物に対しては赦されていても人間に対し、してはならないことがあります。どんなに飢えていても人間の肉を食べること、快適に暮らすためにゴキブリやハエのようにホームレスの方や社会的弱者を死に追いやること。いくら医療の発達のためとは言え、人体実験、あるいは胎児や人間の胚を実験材料にすることは、神様の前に罪であると私は考えます。それは人間と他のいのちとの絶対的な違いを見失った生命観から起こる大きな罪と言えるのではないのでしょうか？

「どうしてごきぶりは殺してよくて人間は殺してはいけないのか？」一人の少年犯罪者の言葉が社会を震撼させました。その応えは創世記1章にあるのです。私は願います。ここにおられる皆さん全員が、「なぜ、人を殺してはいけないのか」それを聖書から確信をもって語るものとして今日この場から日本の社会へと遣わされて行きたいと願うのです。

「我々にかたどり、我々に似せて」と聖書は人間のいのちについて教えています。「いのち、なぜ大切か？」聖書はその問いに対して、神様のかたちを持つ故に、「神の所有だから」、「他のいのちとは絶対的に違うから」と応えています。お互いは「いのちなぜ、大切か？」その聖書的な根拠をしっかりと心に留めていのちの大切さを見失いつつあるこの社会に遭わされていきたいと願います。

いのちどう大切？ ～いのちの質に依存しない

続いて二つ目のポイントです。「いのちどう大切か」ということを別の聖書箇所から共に見てゆきましょう。聖書の描くいのちの尊厳、それを一言で表現しますなら、「いのちの質に依存しない」ということです。聖書はどのような種類のいのちであっても、それが人間のいのちであるなら絶対的な尊厳のあることを示しています。

さらに分かりやすく申し上げますなら、大きないのち、小さないのち、強いのち、弱いのち、生産性の高いいのち、生産性の低いいのち、どれも同じ価値であるということです。いのちの大小、強弱、優劣で価値に違いなどないのです。いいえ、それどころか、聖書は弱く劣ったいのちの尊厳を強調しています。そのことを、コリントの信徒への手紙第一の12章22節から25節の箇所から見てゆきましょう。

弱いのち、劣ったいのちについて聖書はどう評価しているのでしょうか。22節によれば、弱い人ほどなくてはならない存在なのです。さらに23節では、尊くないと思われる存在、劣った存在を教会の交わりは尊ぶのだと宣言します。そして、24節と25節は私たちに教えます。そのような弱いのちを大切に、劣ったいのちを尊ぶことを通じて、教会は立て上げられ、分裂のないお互いを配慮しあう交わりが形成されるのです。

聖書は「弱い人」について「いてもよい」「いた方がよい」ではなく「か

えって必要」つまり「いなくてはならない」とその絶大な存在意義を示しています。強く優秀な人ばかりが集まった教会があるとすれば、その教会は致命的な欠陥教会です。「いなくてはならない人」を教会に欠いているからです。

ある本でアリの社会に働く不思議な調和について読んだことがあります。皆さんはアリと言えば、働き者の代表のようにお考えでしょう。しかし、実際はそうでもないようです。アリの社会の中で大体2割は本当によく働いて役立っているそうです。そして大多数にあたる6割は忙しそうに働いているように見えるのですが、無駄も多くてそこそこ役立っています。そして最後の二割は意味なく動き回るだけでほとんど貢献度ゼロだと言うのです。つまり、2：6：2という割合でアリの世界には優れたアリと劣ったアリがいるわけです。

そこで、ある実験をします。アリの社会から、貢献度ゼロの最後の二割のアリを取り除きます。すると、皆さんどうなったと思いますか？ 会社のリストラではありませんが、生産性が上がったと予想されますか？ いいえ、そのアリの社会は、しばらくするとまた、2：6：2の割合に落ち着いたそうです。そうです。貢献度ゼロの2割のアリは「かえって必要な存在」なのです。

「弱く見える部分が、かえって必要」、「見劣りのする部分をいっそう引き立たせて」、「体に分裂が起こらず、各部分が互いに配慮し合っています。もしかすると、神様は、この聖書の言葉を自然の世界を通じて私たちに啓示しておられるのかもしれない。

この聖書の箇所は直接的には教会のことを教えています。教会の外の社会についても神様が同様のことを願っておられるのは間違いないでしょう。効率主義、リストラ、競争社会、強くなくては優れていなくては価値

がないと思わせるようなこの社会です。お互いが相手に優れていること強いことを要求して、実に寛容さのない社会を作り出しています。その中で、どんなにお互いが疎外しあい、潤いのない殺伐とした社会を作っていることでしょう。そして、そのような傾向が教会の交わりにまで侵入してしまっているということはないでしょうか？

まさに弱いものがなくてはならないもの、劣ったいのちを尊ぶ中で神様は社会に調和を与えられるのです。弱い人は強い人に大切な事を教える先生です。劣った人からこそ、優れた人は学ぶべきことがあります。

聖書は弱く劣ったいのちについて絶大な尊厳を与えておられます。今この時、そのようないのちについて考えましょう。それは家族や教会の中、あるいは職場や学校やご近所にいる誰かかもしれません。もしかしたらご自分のことかもしれません。誰であれ、そのいのちの尊厳を御言葉にたって確認しましょう。そして強弱、優劣で人と自分を比較したり、人を差別するような生き方から解放されましょう。弱い劣ったいのちを重んじて調和ある社会を作る一人でありたいと願うのです。

いのちどれ程大切？ ～神のいのちとの等価交換のゆえに

そして、最後のポイントです。最後は、ローマ信徒への手紙5章8節の言葉から、「いのち、どれほど大切なのか？」についてお話をさせていただきます。

「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」

この言葉の中には私たちがどんなにか神様に愛されているか、それ故に

どんなに価値があるかが示されております。私たちがまだ罪人であった時、つまり「神などいない、いたとしても自分とは関係ない、イエス様が十字架に架かり命を捨ててくださった、そんなことは知ったこっちゃない」と言っていた私たちを神様が先に愛してくださったのです。神様に愛される価値などどこを探しても全くない、そのままの私たちを、神様は愛してくださっているのです。

さらにその愛が犠牲を伴った真実なものであることを知るなら、神様に愛された私たちの命の価値はもう、揺ぎ無いものとなります。それが「キリストがわたしたちのために死んでくださったこと」ということです。

先ほど、「いただきます」の語源をお話しました。実はお互いのためには魚や牛や豚や鶏のいのちだけではなく、神のいのちの犠牲が支払われているのです。焼き魚のいのちが殺されて、お皿の上に乗っているように、神のいのちが殺されて、十字架というお皿の上に乗せられて差し出されます。「私のこのいのちをあなたのいのちとして食べなさい」と。それを「いただきます」、「あなたのいのちを私の命としていただきます」と言って食べた者、それがクリスチャンなのです。

このいのちをいただくなら、生きながらにして、神のいのち、永遠のいのち、死を付き抜けていき続けるいのちを得るのです。そして、クリスチャンであるなしに関係なく、すべての人間は神のいのちが差し出されているのです。神様のいのちと引き換えにしてもよいほど、神様はわたしたちのいのちを愛し、私たちのいのちに価値を与えてくださっています。

私たち人間は、何かできるとか何かを持っているなどの価値があるなら愛される資格があると思います。しかし、神様はそうした価値とは無関係に、人間を愛の交わりの対象として想像されました。ですから、私たち人間は、価値があるから愛されているわけではありません。愛されているから価値があるのです。

神様は永遠に生きるご自身の最高の命と罪の故に永遠に滅ぶ私たちの最低のいのちをその愛の故に交換を申し出てくださったのです。経済用語で表現するなら、神様はご自身のいのちと、ちっぽけな私たちのいのちとを等価交換してくださったのです。

ある総理大臣が、「人一人のいのちは地球より重い」と発言されたようですが、とんでもありません。人一人のいのちは、地球どころかそれを含む全宇宙を創造された神様ご自身のいのちと同じ重さなのです。「自分のこのいのちが、何と神様ご自身のいのちと同じ価値！」私たちは自らのいのちに与え得た想像を絶する価値を驚きと感動をもって受け止めたいものです。

「お宝鑑定団」という人気テレビ番組があります。ある時、不謹慎な想像をしてみました。「人間のいのちという宝の鑑定額はどれくらいか？」と誰かのいのちがあのお宝鑑定団で評価されたらどうなるでしょう？皆さんのいのちがワゴンに乗って登場です。鑑定が始まります「いい仕事していますね。」「ここは少し残念ですね」などと言いながら鑑定終了。

さて、驚きの鑑定結果は？もう電光掲示板が爆発するでしょう。ずばり、その鑑定額は全宇宙で最高の価格なのです。私たちのいのちに対しては既に神様のいのちと言う代価が支払済みなのです。オークションにたとえるなら、もう、2000年前に落札済みだからです。まさに私たち一人一人の命というものは全宇宙最大の価値を持つのです。

さらに驚くべきことにこの鑑定額には先ほどお話しましたように個人差はないのです。このいのちの価値は男性も女性も同じです。あかちゃんも大人も高齢者同じ評価額なのです。白人も黒人も黄色人種も同じ、ノーベル賞受賞者も凶悪犯罪者も同じです。障害のあるなしに関係ないのです。

何を持っている持っていないという所有や、何ができるかできないかという能力、役に立っているかないかという貢献度などに一切、関係なく、お互いは宇宙最高の価値があるのです。

「キリストがわたしたちのために死んでくださった」、聖書はそのように私たちのいのちの価値を教えます。神様のいのちと引き換えにしていた、それほどに私たちには絶大な価値があるのです。だからこそ、自分の人生を大切にしなければならないのです。同じように私たちが日々出会う人のいのちも大切にしてお互いでありたいと願うのです。

最後に

この朝は「いのち、なぜ大切か、どう大切か、どれほど大切なのか」と題しまして、聖書からいのちの大切さについて三つの面で見えてきました。

この語りかけを真実に受け止めて、まず、自分のいのちの尊厳を確認しましょう。私たちのいのちは神様であり、神のいのちと引き換えにされていることを覚えて、正しく自分を大切にできる人でありたいと願います。

次に自分以外の人々の命の大切さを確認しましょう。自分にとって価値のないように思えるいのち、取るに足らないと思えるいのち、それどころか自分にとって不都合ないのち、いないほうが良いと思えるいのちさえ、神様の目には尊いかけがえのないいのちであることを覚え、身近な人々を好きになれなくても、少しずつでも愛して、大切にしていけたらと願います。

最後に、この大切ないのちを何のために使うのでしょうか。「使命」という言葉は多分、「使いへの命令」という意味を持つのでしょうか。しかし「使命」という言葉は「命を使う」とも読めます。神様のいのちと差し替えにされたほどの、このかけがえのないいのちを、私たちは何のために使っていくのか？ そのことも、神様は私たちに問いかけておられると思

います。お互いの人生の中で、神様からの委ねられている具体的な使命を
発見し、それを果たす人生でありたいと願うのです。